

第46回

モラロジー研究発表会(柏会場)を開催
徳をめぐる多様な視点から議論した二日間

道徳科学研究センター

平成三十年度のモラロジー研究発表会(柏会場)は、一月二十六日と二十七日の両日、廣池千九郎記念講堂において開催し、全国各地から百四十一名が参加しました。

◆「徳」を出発点に

道徳科学研究センターでは、平成三十年度の共通テーマ「徳について考える」について、それぞれの専門分野から研究を進めてきました。

私たちは、「徳」という言葉を日常のさまざまな場面で何気なく使っていますが、いざその意味の説明を求められると「意外と難しい」と感じる

ことも多いのではないのでしょうか。

徳はどのように生まれ、どのように変遷し、また現代的な諸問題との関わりはなかく、どのように働いているのでしょうか。徳は倫理や道徳とどのように関わるのでしょうか。また、廣池千九郎博士は徳をどのように説いたのでしょうか。このように、今回の共通テーマの背景には、「徳」について基本的なところから多面的に検討する、という狙いがありました。

◆「徳とは何か」を考える

廣池幹堂理事長、犬飼孝夫研究センター長の挨拶に続き、初日はまず、徳に関する三つの発表が行われました。



副センター長・主任研究員
麗澤大学准教授
宮下和太

宮下和太主任研究員は、「徳」という文字の歴史的な変遷について報告しました。「徳」には元

来、現代の私たちが主に使用している倫理的な意味(品性や人格)に限定されない意味の広がり(例えば「天命の根拠」や「生命力」としての徳)があった、という事実は、私たちが徳について考えるうえで示唆を与えるものでした。



センター長・教授
麗澤大学教授
犬飼孝夫

犬飼孝夫教授は、廣池博士が提示した内容のもとに、陰徳や積徳、義務・数量化・苦難の受容などの観点から、徳を考えるうえで基本的な視点を示し、また、世代を超えた徳の継承の重要性について報告しました。



教授
麗澤大学教授
梅田徹

梅田徹教授は、最高道徳の実質的な内容を示す



「自然の法則」や「神の心(慈悲心)」などの概念について整理したうえで、最高道德の構造について分析し、検討しました。
それぞれ、モラロジーを学ぶ人たちへのメッセージが込められた発表でした。

◆ 道德の起源と進化

その後行われた講演では、立木教夫客員教授が、近年、進化人類学などの領域において、道德の起源と進化に関する研究に大きな進展があったことを述べました。



立木教夫
客員教授
麗澤大学名誉教授

まず、道德は、人類とチンパンジーの共通祖先が分岐した後、「協力」を基盤として、四〇万年前頃に、二者関係における役割理想に基づく「二人称的道德」が創発され、それが一五万年前頃に、集団的慣習・規範・制度に基づく「客観的道德」に進化したとするマイケル・トマセロの研究成果を踏まえ、起源から見た道德の本質が協力・共存にあることを示しました。

そして、廣池博士が構想した道德進化論を現代の道德研究の理論的枠組みの中に位置付けたうえで、慈悲や正義などの徳の起源について考察し、慈悲は動物の親子関係における愛着に由来すること、正義は初期人類の食物分配における公平の感覚に由来することを述べました。

最後に、人類が現在直面している最大の道德問

題である国家間の対立について、道德進化の観点から言及しました。

今回の内容は、今後の道德研究の基本的枠組みと方向性を示すものであり、参加者からは多くの質問や意見が出されました。

続いて行われた懇親夕食会では、発表についての感想を共有するなど、にぎやかに交流を深めました。



平成30年度 モラロジー研究発表会(柏会場) 発表者・テーマ

1月26日(土)

【個人発表】

宮下和夫：「徳」字について
犬飼孝夫：徳をどう説くか —— 陰徳と積徳をめくって
梅田 徹：廣池千九郎が提起した「最高道德」の内容と構造に関する考察

【講演】

立木教夫：道德はいつ始まり、どのように進化したのか —— 自然史の観点から

1月27日(日)

【個人発表】

宗像俊輔：労働者の「品性」の争点化と「労働倫理」の誕生 —— 19世紀アメリカにおける鉄道業の実践を手掛かりに
古川範和：徳を考察する方法論としての価値科学
横田理宇：テキスト分析に基づく品性資本定量化の再検討
小山高正：家系を継ぐ意義とその機能について —— 少子高齢化した核家族社会を生きるために

【ミニ・シンポジウム】

「徳をめぐる個人と社会」

大野正英：共同体と徳
竹内啓二：社会構造主義と道德
木下城康：“Meaning, Relationships, Engagement” 時代における「徳」の扱い方 —— 対人援助コンピテンシーと「徳」

【全体討論】

◆ 事例・方法論・実証・継承

二日目の午前中は、四名の個人発表が行われました。



宗像俊輔
研究助手

宗像俊輔研究助手は、アメリカの鉄道業における労働倫理の誕生を取り上げ、一九世紀半ばには、機関車の運転士(機関士の組合活動の中心に「平静・節酒(Sobriety)」「正直(Truth)」「道德性(Morality)」の徳目が据えられたことなどを紹介

し、このような取り組みが、その後、全米で行われた労働者教育の基盤形成に貢献したことを指摘しました。



古川 範和
研究助手

古川範和研究助手は、ロバート・ハルトマン著『価値の構造』をもとに、「価値科学」という視点から「徳」を考察しました。

そして、道徳科学が徳を明確に論じるためには、特定の文化圏において形成されてきた具体的な徳の内容を前提とするのではなく、より抽象的・普遍的な視点から考察することが必要であると述べました。



横田 理宇
研究員
麗澤大学助教

横田理宇研究員は、企業活動における徳（「品性資本」）の表れ方に関する実証的研究の結果を詳細に報告しました。

道経一体経営を行う経営者にインタビューを行い、そのテキスト分析の結果から、最高道徳的経営とは、人を大切にしている経営であり、社員や利害を共にする人たち（ステークホルダー）の幸せや気持ちを重視するものであることを、実証的に示しました。参加者のコメントやアンケート結果から、モラロジー研究における実証的研

究、そして道経一体経営の価値に対する関心の高さがうかがえました。



小山 高正
客員教授
日本女子大学名誉教授

小山高正客員教授は、「家系を継ぐ意義とその機能」について報告しました。インターネットのネットワークで水平につながる現代人にとって、家系という縦のつながりにはどういう意味があるのか、モラロジーの伝統の原理は、それに対して何を提示できるのかについて考察しました。そして、「祖先の苦勞の結果として自分があり、自分が善を積み、徳を遺すことで子孫が安心して生きることができる」という廣池博士が示した本質的精神をもとに、時代には柔軟な対応を提案していくことが重要である、との考えを示しました。

◆個人と社会の幸福と調和

二日目午後に行われたミニ・シンポジウム「徳をめぐる個人と社会」では、三名がそれぞれ「共同体の善と個人の徳の関係」（大野正英教授）、「多様な



左から宮下氏、木下氏、竹内氏、大野氏

道徳原理の並存を歓迎する社会構成主義」（竹内啓二教授）、「キャリア支援における徳の扱い方」（木下城康研究員）という視点から発表し、その後、宮下和太主任研究員のコーディネート

で、個人と社会の関係やあり方について話を進めました。個人と社会の調和を実現するために必要な視点や枠組み・課題を確認し、共有する機会となりました。

◆「人類的課題」と「道徳の実践」

最後の全体討論とアンケートでは、道徳教育、人口減少社会、人工知能（AI）、人権、皇室などの問題に高い関心が示されると同時に、生涯学習の現場、実践で活かせる発表を求めている意見が多く寄せられました。

これらの意見を踏まえ、研究センターでは、平成三十一年度より発表会の名称を「道徳科学研究フォーラム」と改め、今後の人類社会における重要な道徳的課題を取り上げると共に、最高道徳の具体的実践につながる内容に取り組みで参ります。

※大阪会場の開催報告は、次号（五月号）に掲載予定です。

